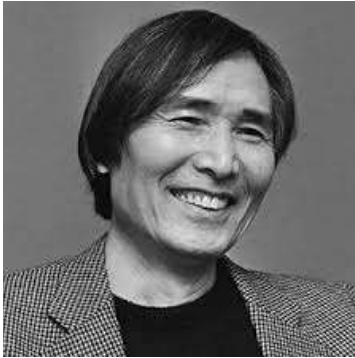


炉辺の枕(6)

『夜の橋／藤沢周平』

多彩な人間の生き方を描く

美賀多台 つだわたる



時代小説の作家はあまり読んでいません。藤沢周平と池波正太郎ぐらいです。9 条の会員で亡くなられた浅黄斑さんのものもミステリーの『きょうも風さえ吹きすぎる』ぐらいで、後年の時代小説は読んでいません。あとは松本清張や宮部みゆき等の時代物は読んでいますが、柴田錬三郎や隆慶一郎、津本陽などの剣豪小説は数冊です。

最近、今村翔吾の『八本目の槍』を読みました。羽柴秀吉の「賤ヶ岳の7本槍」の武将の新しい解釈と石田三成を絡めて、とても面白く読んだのですが、どこか違うと思ってしまいました。

時代小説は、武家が支配する封建社会の制約の下で、現代にも通じる人間像を描くものだと思います。

池波正太郎は『剣客商売』『仕掛人・藤枝梅安』のシリーズは大体読みました。その上で、やはり時代小説は藤沢周平に尽きます。

彼の代表作は『蝉しぐれ』であり、私の好きなのは『用心棒日月抄』シリーズですが、藤沢周平が持っている多様な作風を知ってもらう本をあげることにします。

多彩な短編

『夜の橋』は短編集です。短編の名手であった藤沢周平の様々な特徴を集めた傑作集と言えるでしょう。

1975 年～1978 年に書かれた 10 篇で、作風が「明るく」変わったと言われる 1973 年の直木賞『暗殺の年輪』の直後のものです。

大きくは武家社会と市井の庶民の暮らしを描くものに分けられます。それぞれに厳しい生活を描くもの、男女の気持ちの揺れを描くもの、剣劇ものなどがあります。そこには真摯に世の中を生きる人々がいます。

この短編一つ一つについて私の感想を交え簡単に紹介します。

『鬼気』は兵法者の真髄です。「剣の名手」と噂される中年男を、腕自慢の若者たちが「試し」て、見たものはなにか。

『夜の橋』は男女の気持ちです。博奕にのめりこんだ鋳職人の亭主を見限って別れた女房が「相談」にきたことは、再婚の話でした。

『裏切り』はとても怖い女の気持ちを描きました。これは全くのフィクションだと思います。生真

面目な研師の女房が出会い茶屋で殺され、亭主は意外な犯人を見つけました。

『一夢の敗北』は名人は名人を知る話。米沢藩の指南役一刀流の達人一夢が上杉鷹山が招聘した儒学者を真夜中に襲撃します。

『冬の足音』は少女が脱皮する話です。鋳職の跡取り娘が、家を出ていった若い職人を追い掛け、そして世間を知りました。

『梅薫る』は「こんな話はない」という「美談」を書いています。嫁に行った武家の娘、身もごっているにもかかわらず、まだ昔の許婚に心を残しているのを父が諭しました。

『孫十の逆襲』は映画『七人の侍』ばりの乱闘劇です。30 年前に一度足輕で戦場に出ただけの老農夫の孫十がリーダーとなって、隣村に居座った野伏せりを退治します。

『泣くな、けい』は身分を越えた男女の愛です。妻が不在の夜に女中を手籠めにした入り婿の武士は、その女中けいに、首を掛けた重大な頼みごとをしました。

『暗い鏡』は近くて遠い伯父と姪の話です。出来の悪い弟が早く死に、少し面倒を見た姪が殺されて、娼婦になっていたことがわかる。「なぜだ」鏡職人の男は、姪の人生を追いました。

11 月の初めに山形県鶴岡市にある「藤沢周平記念館」に行ってきました。映画やテレビドラマの映像もあり、多彩な活躍を紹介するいい展示でした。藤沢周平の温かい人間性を感じました。

